幼児の友だち関係の発達について

―砂遊びを中心として―

石坂昭子
藤谷美佐子
倉田麻美子

四月に新しい幼児を迎え〝今年こそは〟と意気込み、期待と不安のいりまじった気持ちの中で入園式を迎えます。教師である私たちがこのような気持ちをもつのと同じに、幼児たちの方でも、はじめて自分を迎えてくれる幼稚園という新しい環境――教師も含めて――に、どんなにか不安と期待をもっていることでしょう。この幼児たちを迎えて教師としては、一日も早く幼稚園になれ、集団生活の中で安定感をもって遊べるようにしたい、のびのびと行動する中で、はっきりと自己を主張し、また、相手の気持ちも受け入れて、協力していくことのできるような幼児になってほしいなど、さまざまな夢を託して、幼児の成長を願う気持ちでいっぱいです。

そのためには、まず教師と幼児とのふれあいが十分満足されることが大切といえましょう。それを基盤として友だち関係も芽ばえてくるのではないでしょうか。また、幼児は幼児たちの中で発達していく過程において、お互いに要求を出し、ぶつかりあいながら、その中で教師の援助によって、好ましい人間関係が育っていくのだと思います。

そこで、今日は、はじめての幼稚園という集団生活に入ってきた幼児たちが、どのようにして友だち関係をつくっていったかということを、砂遊びという場面を通して見ていきたいと思います。

幼児は、いろいろなものをつくり出すということが大好きで

す。それは自分の中にもっているものを表現することによって、情緒や表現意欲を満足させることになるからです。そのために、柔軟性をもち、変形のできる（可塑性のあるもの）素材としての、水、土、砂などは、とくに好まれます。なかんずく砂は、にぎったり、ほったり、高くつんだりといういろいろなことにより、もっとも素朴な基本的な要求を満足させることができるし、そのなかに、自己を没入することによって、情緒の安定をもたらすことができます。また、砂遊びでは、平行遊びが何らの抵抗もなくできるところであり、その中で、友だちとの交渉を、人間関係を深めていくことができる場といえます。そして、時には、他の活動での人間関係における要求の不満を、砂遊びを楽しみ満足することにより、情緒の不安定を自分で治療するということも、無意識の世界でしていることが多いともいえましょう。それから、砂遊びは一日の幼児の生活のリズムの中で、要求に応じて自由にとりくめるという特色をもっています。つまり、ウォーミングアップ的にするということも可能であれば、それに本気になってとりくみ、一日の活動の中心をそこですごすということも可能であります。また、ウォーミングアップのつもりが、いつのまにか、本気になってとりくむことになるということもあるし、同一時間に、同じ場面にいる幼児たちにとって、砂遊びは、ひとりひとりの幼児の要求に応じて満足を与えることが可能である遊びです。

そこで、砂遊びを通して、その中で〝友だち関係がどのようにめばえ、生まれ、育ち深まっていくか〟ということを中心に、一学期における友だち関係を中心にして、以下に実践の結果をみていきたいと思います。

(一) 教師とのふれあいによる安定の中から友だち関係のめばえができる

入園式の日、母親の手からはなれたばかりの幼児たちには、幼稚園では何をしていいのかということに対する不安は、たいへんなものでしょう。大部分の幼児は、どのようにして遊んだらいいのかという不安で、うろうろしてしまいます。こんなとき「砂場で遊びましょう、いらっしゃい」とそばにいる幼児たちによびかけて、教師もいっしょに砂遊び場にいくと、半べそをかいていたE夫も、N子もみんなといっしょにきました。そして教師自身がどっしりと腰をすえて「さあ、山つくる？　それとも川にする？」と話しかけながら砂を高くつみはじめると、他の幼児らもいっしょになって大よろこびで「山にしよう」といいながら、一生懸命につくりはじめます。そして、だんだん

泣きべそ顔が笑顔にかわっていきます。砂というもっとも抵抗のない遊びへのさそいは、N子をすっかり安心させたようです。また〝先生もいっしょに砂遊びをしている〟ということでいっそう安定感をもったようでした。教師と幼児とのふれあいがまず大切であるといわれますが、教師が幼児の近くにいてほしいという感情を十分認めてやり、本気になって、いっしょに遊んであげるということを常に心していかなければならないと思いました。

一方、E夫はどうだったでしょうか。E夫もいっしょに砂場へは来ましたし、みんなと同じようにすわりこんでいましたが、よくみるとただ砂をいじっているだけで、まだ、自分を出して遊ぶというところまではいきませんでした。同じように、砂場にすわりこんで、一見、いかにも楽しそうに砂遊びをしているかに見えるこの光景も、ひとりひとりの幼児をよく見ると、必ずしも同じではありません。やはりひとりひとりの幼児について、どのように指導するかの判断をあやまらないようにしなければならないとつくづく思いました。

たくましく手全体でどんどん砂をもりあげていくA夫たち、たくましいとまでいかなくても、砂をまるめたり、たたいたりして、砂を使って十分自己を表出して遊んでいるという感じのN男たち、その中にまじって、ほんのおしるしに砂をいじっているだけのE夫のような幼児たちも、よく見るとまだまだたくさんいました。教師としては、一見、砂遊びを楽しんでいるかのように見えるこれらの幼児たちの行動を、ただ表面だけとらえて、「元気に砂遊びをしているから安心」といった安易な気持ちで、見おとしていたのではないかということを強く反省させられました。

入園当初、砂遊び場へさっさといって遊んでいる幼児たちは、砂遊びをしているから安心とばかり、ついついその幼児たちとの人間関係が少なくなり、かえってあとに問題を残すことになるといわれているのは、このE夫らのような幼児たちを見おとしていることにも原因があるのではないかと思われました。

その後、E夫は相変らず、砂いじりをしているだけの状態が続きましたが、砂場にいるというだけで安定感があるのでしょうか。砂場にいっては、すわりこんでいるのです。誰と話すのでもなく、誰の仲間というのでもなく、他の友だちとは何の交渉もないような、また他の友だちのことは一向無関心のような存在で砂をいじっているだけなのですが、他の幼児たちが「やめようか」とひきあげていくと、E夫もやっぱりやめていくのです。

このことを見たとき私は、はっとしました。何のかかわりあいもなく、ひとりで遊んでいるかにみえる、このE夫も、決してひとりではなく、みんなと同じ砂場にすわり、砂をいじっているだけでE夫は満足し、友だちといっしょに遊んでいるのだという気持ちを心の中で感じていたのだなと思いました。友だちと遊んだという経験をあまりもたないE夫にとっては、この砂遊び場は、絶好の安定の場であり、ただみんなといっしょにいるというだけで十分だったのです。

ともすると、早く友だちをさがしてあげたいという気持ちから、教師が先まわりをして「Aちゃんと仲間でしてみたら」などといってしまうことがあり、E夫の場合も、そうしてあげることがE夫のためだと思っていましたが、じっくりと見つめて、あわてたことをしないでよかったと心の中で反省しました。

〝待つ〟ことの大切さを痛感させられたひとこまでした。そして、教師がこのE夫をそっと見守ってやる中で、E夫はりっぱに、自分の力で、ひとりだちできる幼児に成長していくのだとつくづく思いました。

(二) 友だち関係は、偶然の機会の中から生まれる

砂遊びでは、グループもできやすく、友だちを求めることが、他の活動に比して早い時期にあらわれるのが特長のひとつですが、入園して一か月くらいもすぎると、そろそろ、グループらしいものができてきます。A子、T子、M男の三人がかたまって、砂いじりできれいな砂つくりをはじめました。「このバケツにいっぱいきれいな砂つくろう」とA子がいい、T子も賛成して砂つくりがはじまり、たまたまそばにいたM男も仲間に入ったというわけです。そのうちに他の幼児たちにも流行して、きれいな砂つくりは大繁盛、砂いりのあるだけを使っての盛況ぶりになりました。すると、自然に石ころができるわけです。「だれか石ころ集める人になってほしいわ」とA子がいいました。みんなは砂いじりがおもしろくてすぐに応じられません。そのとき、ふと私の眼にとまったのがI美でした。

I美は同じ町から三人の女児が通園していて、たまたまひとりだけ別の組になったため「家に帰ってからも、遊んでもらえずかわいそうなので、同じ組にしてもらえないでしょうか」と母親から訴えのあった幼児でした。でも、そのことに負けずに、何とかしてI美が本来の姿になって、元気に友だちと遊べるようになってほしいと願って、そのチャンスをみつけなければと思っていた矢先でした。

私はとっさに「I美ちゃん、石ころやさんがいなくて困っているから、先生といっしょに石ころやさんしましょうか」とさそってみました。I美はにっこりうなずいてうれしそうに教師のそばにやってきました。教師もいっしょに石ころやさんになってあげたので、いっそうれしかったのでしょう。「ここに入れてください」とみんなに声をかけて石ころやさんの役割を果たしはじめました。「はい、石ころやさん、これいれて」「ぼくのもはい、いれてください」とつぎからつぎへといわれて、I美は大いそがし、しょんぼりしていたようなI美の顔がみるみるいきいきとしてきました。もう教師がそばにいるとか、いないとかは問題ではないといった表情です。私もほっとしながら、そっと見守っていました。

でもそのうちに、少しあきてしまったのでしょうか、砂遊び場をはなれて、ブランコにのりにいってしまいました。私は〝せっかくあんなに喜んでみんなの中で遊ぶI美を見られてうれしかったのに〟とちょっとがっかりしましたが、すぐに呼び戻したりせずようすをみていました。するとI美がいなくなったのに気づいたT子が「石ころやさん、早くきて」とI美に向かって声をかけたのです。すると「はーい」と大きな声で返事をして、また砂遊び場にもどり、石ころやさんの続きをしてくれました。

そしてこのことがあってからI美は、見違えるように、明るい表情で登園するようになり、みんなの中にとけこんで遊ぶことのできるI美になりました。みんなの中で受け入れられたという自信で、こんなにも変わるものかと改めて感じさせられました。砂遊びの特性をいかして、友だち関係を結びつける機会を、その幼児たちのまわりから見のがさないことが必要であり、保育という必要の場面の中に、偶然性があるということ、つまり、機会としては、偶然ではあるが、それは、幼児にとっては、必然的な発達であるということを、保育の中にいかすということが、指導の重大なポイントではないかと、改めて感じさせられました。

㈢ 教師や友だちに受け入れられたことによって、人間関係に入る

「先生、S君は保育園にいたときも、わるいことばかりして、先生に叱られてばかりおったんやに」とか「先生、またS君、私たちのつくった家こわしたに」「S君は乱暴やできらい」という会話が、入園して二カ月もたつとぽつぽつ見られはじめます。それは、幼児の個性がはっきりしてくるため、友だちに対

するすききらいがでてくるからでしょう。このころは、入園当初とは別の意味で、友だち関係がかわってくる大切な時期になってきます。教師としては、Sの気持ちを受容してやりたいと思いつつも、つい乱暴な行動をとられたり、みんなの遊びを乱すような行動をとられたりすると、どうしても感情的になってしまいます。そんなある日、Sが「先生、大きい山つくったので見にきて」と私を呼びにきました。こんなときのS君は別人のように素直でごく普通の幼児にみえます。

この幼児もやはり、教師に認めてほしいという要求をもっており、それが強かったあまり、かえって教師を困らすような行動をとっていたのかもしれません。そしてこれまでの教師との人間関係が十分でなかったことを反省させられると同時に、教師があの子は問題児だなどときめこむような偏見をもって接してはいけないのだということをしみじみと感じさせられました。

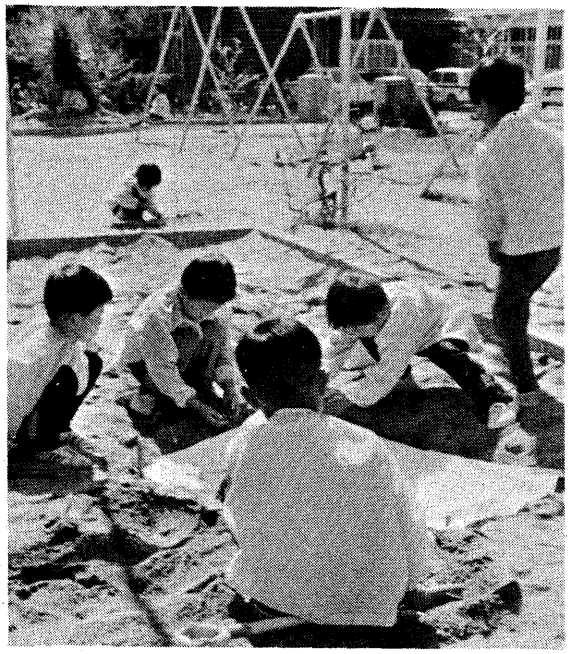
「先生すぐみせてもらいにいくわ」とさっと砂遊び場にいくと、なるほど大きな山ができていてSの額には汗がにじんでいました。「S君ひとりでしたの?」「ひとりとちがう、HちゃんやU君もいっしょにしたん」とうれしそうです。

HやUは、一生懸命に山の続きで、川のようなものをつくっていました。そしてSはその幼児たちに向かって「水くんでこようか」と呼びかけました。「そやな、水くんできてくれる」「うん」こんな会話をかわしてSは水くみにいきました。もう誰からも批難されたり、攻撃されたりしていません。山をつくろうというひとつの目的に向かって協力できるという砂遊びに救われて、S君もやっとみんなの中に入ることができるきっかけをみつけたようでした。「先生、ここにトンネルつくろうか」Sは教師ともみんなにともつかず、賛成を求めました。みんなは「うん、そうしよう」とSの提案を受容し、今度はトンネルがはじまりました。「先生大きいのにしよう」「S君、もっと下の方からせんとくずれるぞ」「ちょっと水つけようか」こんな会話をしながら、トンネルほりがはじまりました。

だんだん両方から近づいていきます。「もう少しがんばって」私も手に汗を握るような気持ちで、このトンネルつくりの成功を願いました。

「先生できた。Hちゃんの手と握手したに」Sのうれしそうなはずんだ声がかえってきました。

「よかったわね。先生にもさせて」　私もいっしょに手を入れました。S君の手と固い握手、何か今までとはちがったS君への親しみを覚えました。S君の顔も喜びにみちあふれていました。そしてみんながかわり番に、トンネルをつくっては握手



で喜びあうという遊びが展開し、砂遊び場いっぱいに山ができ、川ができ、トンネルができ、橋ができてというように、遊びを展開することができました。

入園して二カ月という段階でこのような遊びができるのは、砂遊びならではのことであり、集団の人数も途中でへったりふえたりはしますが、その変動を気にしないで活動が続けられるという、すなわち、集団の構成も可塑性にとんでいるという砂遊びの特性によるといえましょう。そして、自分のつくったトンネルの中での教師との握手、友だちとの握手による身体接触は、幼児たちの人間関係を深めていくのに、とても必要なことであり、この身体的な接触を通してのからだと心のふれあいは、もっとも大切にしていかなければならないと思うのです。

㈣　しだいにグループ内での人間関係が、深まっていく

KとNとY一とOは、すでに保育園からのつながりがあるので、比較的早くから、グループ遊びをはじめた幼児たちであるが、六月のある日、その日も、朝登園するとすぐ砂遊び場にとんでいって、大きいスコップで穴ほりをしているようで、そのうちにKが「先生、大きい紙ちょうだい」といいにくる。「何するの」「何でもええで、はようちょうだい」「秘密やもん」といって紙をもらうと一目散に砂遊び場にもどっていきました。「秘密やもん」といったひとことがいかにもほほえましく、遠くからようすを見ることにしました。

Kが紙をもっていくと、さっそくほった穴の上に広げています。どうにか穴がかくれると、その上に砂をのせて穴がわからないようにしています。Nが砂のかけ役で、あとの三人は一生

懸命紙のはしをおさえ、「そっとのせやなあかんに」「うん」「はしっこの方からのせやなあかんに」など口々に注意しています。それでもうまくいかないようすで、「ぼくがかけるでN君もっとって」と今度はKがかけ役になりました。Nは少し不服そうな顔でしたが、それでも、もち役にかわりました。

そして何とかおとし穴を成功させようという気持ちで四人が力を合わせているようすが、ありありとみられました。そのうちに、Y一が「これでおさえよう」といって、くいのようなものをたてて紙がおちないようにすることを提案しています。Y一は「なあ、ぼくええ考えしたやろ」と得意顔です。

できあがると「だれにもいうたらあかんに」とうれしそうに顔をみあわせています。グループ内での秘密が守れるという仲間関係ができていることがうかがわれました。

そのうちに「先生、ちょっときて、ここ通ってみて」と手をひいてよびにきました。「どこを通るの」といわれるままに砂遊び場にいき、穴の上を歩くと見事にはまってしまいました。「わあ、おどろいた」と大げさにおどろいた表情をすると、手をたたいて大喜び。四人の秘密は見事成功ということで満足感にあふれ、どの幼児の顔も輝いていました。

このような遊びは、自分を出し、ぶつかりあいながらも、協力してひとつのものをつくりあげるという、強いグループ内の人間関係を通して経験することがができるわけです。砂遊びはこのような幼児の要求を製作活動などに比して、早い時期に満足させることのできる特性をもっていきますし、ひとりひとりの幼児はその中で情緒の安定を得て、しだいにグループ内での人間関係を深めていくということがいえるのではないでしょうか。

以上、一学期間に見られた砂遊び場での幼児の活動を通して、友だち関係の深まりをみてきましたが、日々の保育のあらゆる場面でも同様に、いろいろな形で、友だちとぶつかりあい、その中で、時には逃避したり、攻撃的になったりしながらも、教師がそれらの幼児の感情を受容してあげることによって、よりよい友だち関係がつくられていくということになりましょう。また、そのための援助ということが大切だと思います。

幼児が集団の中で活動することにより、満足感をもたせることが、結局のぞましいパーソナリティを形成していくことになり、それが幼児の友だち関係をより発展させていくことになるのではないでしょうか。

（四日市市立納屋幼稚園・同神前幼稚園）